

【原著論文】

沖縄県北部地域で地域活動に参加していない 一人暮らし男性高齢者が語る死生観

溝口 広紀, 大城 凌子

A study of view of death by aged men living alone who do not participate in community activities in the northern part of Okinawa

MIZOGUCHI Hiroki, OSHIRO Ryoko

要旨

本研究の目的は、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観の構造を明らかにし、その人らしさを大切にしたいエンドオブライフケアへの示唆を得ることである。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者7名に半構造化面接調査を実施し、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。結果、【回避してきた関係性：周囲へ気兼ねして自ら選んだ孤立】、【生活苦を凌ぐ拠り所：ストレスを紛らわすささやかな楽しみ】、【独りで生きる覚悟：周りに迷惑をかけずに自立して生活したい】、【厭世的な思い：身近に死を感じる体験に伴う人生への憂い】、【つなぎとめている関係：苦しい生活を支えてくれる数少ないつながり】、

【最期を迎える心構え：死（死後）を語ることによる安堵】の6つのシンボルマークが抽出された。一人暮らし男性高齢者は、【独りで生きる覚悟】を内在し生活しているが、死を身近に感じる体験から【厭世的な思い】も抱いていた。その一方で、【つなぎとめている関係】にある他者（友人・知人）に、死への不安や死後の対処を語ることで安堵し、【最期を迎える心構え】につながる事が明らかになった。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者への支援として、死後の後始末を託せるつながりを保つことと、独りで死ぬことも含め、その人らしい死のあり様として受容できる看取りの文化を醸成していくことが、その人らしさを大切にしたいエンドオブライフケアに繋がる。

キーワード：一人暮らし、男性高齢者、死生観、孤立死

I. はじめに

高齢化の進展に伴い、一人暮らしの高齢者も増加し（内閣府, 2022a）、高齢者の孤立や孤独死が社会問題視されている。内閣府の調査（2022b）によると、高齢者の中で、「孤独死（誰にも看取られることなく亡くなった後に発見される死）を身近に感じている人（『とても感じる』と『まあ感じる』の合計）の割合は、60歳以上の高齢者全体では34.1%だが、一人暮らし世帯では50.8%と5割を超えている」。厚生労働省（2008a）は、2007年に「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議（『孤立死』ゼロを目指して）」を発足させ、他者とのつながりや地域とのネットワーク作りなどの対策を提言している。一人暮らし高齢者の特徴として、孤独感や孤独死への不安を抱える人は多い（溝口, 大城,

2019）が、孤独死や孤立死の実態に関する全国的調査は見当たらない。2011年に、民間調査機関が行った孤立死に関する調査において、東京23区の孤立死者数と全国の人口動態統計データを使用して、全国の65歳以上の孤立死者数の推計値を出した結果、年間で2万6,821人に上ることが報告されている（菅原, 2018）。

沖縄県では、琉球大学法医学講座の調査によると、2016年～2018年の3年間で、毎年100人以上の孤立死が発生しており、年齢別では60歳代が最も多い（梅田, 2019）。また、沖縄県北部地域の検案担当者によると、2009年～2019年の間に担当した277件の内10件が孤立死で、全員男性であることや、そのうち9件は、2017年以降に発生していると報告している（山田, 2019）。北部地域は、隣近所との付き合いが盛んで、県内でも地域・血縁の紐帯が強く、相互扶助の文化が根付いているとい

われている（琉球新報，2016）。しかし，山田（2019）の報告を踏まえると，孤立死は都会に特徴的な現象ではなく，相互扶助文化が残る北部地域でも増加傾向にあると推察される。

高齢者が自身の死について不安に感じたり，話したりするのは女性に多いとの報告がある（吉田，2010；吉田，木内，2004）。一方，孤立死は女性より男性に多いことが指摘されている（大曾根，2016；川口，高尾，2013）。また，平井ら（2005）によると，外出頻度または友人・別居家族との交流頻度が週1回未満を閉じこもりと定義して行われた調査において，女性は男性よりも閉じこもりが少なく，「年齢が上がっても友人との交流頻度は減りにくい」と報告している。

小笠原（2014）の調査によると，以前は住民同士が支えあいながら暮らしを営んできた沖縄社会のコミュニティの変化について，現在は「住民の意識変化，交流空間の減少等による都市化の進行や少子高齢化の影響によって，地域内に複数存在していたコミュニティは縮小，もしくは統合，さらには消滅するなどしている」ことが示されている。一般的に，ユイマールなど，助け合いのイメージが強い沖縄においても，隣近所との交流等が希薄化する中で高齢者の社会的孤立が懸念される。菅野（2017）は，現在の日本の現実として，何気ない日常を送っている壁一枚向こうでは，様々な縁から絶たれ，孤立死と隣り合わせの生活を送っている人が存在していることや，家族がいても外部との接点がなければ孤立死となり得ることを指摘している。地域包括ケアシステムが導入され，地域とのつながりが重視される一方で，地域とのつながりや関係性が希薄で外部との接点が少ない一人暮らし高齢者への孤立予防への介入は困難な状況が推察される。

地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が，地域とどのように関わり，自身の生と死をどのように考えているのかを，語りを通して明らかにすることは，地域住民や医療専門職による地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者のその人らしさを大切にしたいエンドオブライフケアへの示唆が得られると考える。さらに，孤立死のリスクが高いと推測される地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の孤立死対策や，死の質（QOD: quality of death）を高めていく一助となる。

II. 本研究の目的

1. 目的

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観の構造を明らかにし，その人らしさを大切にしたいエンドオブライフケアへの示唆を得ることを目的とする。

2. 用語の定義

1) 死生観

高岡ら（2009）は死生観について，「文化的違いや個人差によって違うばかりではなく，個人の中でも変化するものである」と述べており，研究における死生観の定義を「死と生に関する見解やみかた」としている。また，河村ら（2016）は，死生観を「人間の生や死，生き方や死に方に関する考え方や見方，価値観」と操作的に定義している。本研究では，地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が自身の生と死に関してどのように考えているのかについての語りから死生観を明らかにすることから，「一人暮らし男性高齢者自身の最期に着目した生や死に関する個人の思いや考え方，価値観」と定義する。

2) 孤立死

厚生労働省（2002，2008a，2008b）は，孤立死の名称を用いているが，孤独死と孤立死の定義については研究者により様々な解釈が存在しており，明確に区別することは困難である。一方で，上田ら（2010）は文献検討を行い孤独死（孤立死）とは「社会との交流がなく孤立し，誰にも看取られず自宅敷地内で死亡し，死後発見される場合」と定義するのが適当であると報告している。このことから，本研究においては，名称については厚生労働省（2002，2008a，2008b）を参考に孤立死の名称を用い，定義については，上田ら（2010）の定義を参考に，「地域活動への参加が無く，誰にも看取られることなく死亡し，その後に発見されること」と定義する。

3) 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者

矢野ら（2008）による高齢男性の社会参加要因に関する研究においては，社会参加を「家族生活を越えた地域社会における老人クラブや，会などの集団活動に自主的に参加すること」とし，社会参加群を「月に1回以上社会参加している人」と定義している。本研究では，自ら地域住民とのかかわりを避けている一人暮らし男性高齢者を対象とすることから，矢野ら（2008）の文献を参考に，「月に1回程度も，家族生活を越えた地域社会における老人クラブや，集会などの集団活動に自主的に参加することがない一人暮らし男性高齢者」と定義する。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は，質的データを用いて現象をありのままに記述し，内容を分析することで理解を深めていくため，質的記述的研究とした。

2. 研究対象者

沖縄県北部地域に在住し，月に1回程度も，家族生活

を超えた地域社会における老人クラブや、集会などの集団活動に自主的に参加していない一人暮らし高齢者で、本研究での半構造化面接調査に同意が得られた者とした。

3. 対象者の選定方法

沖縄県北部地域のA村およびB村の社会福祉協議会の担当者に、研究対象者の条件にあう方の紹介を依頼した。

4. データ収集方法

本研究への参加に同意が得られた研究協力者に対して、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者のこれまでの生活や今後どのように生活し、どのように最期を迎えたいと考えているのかについて、半構造化面接調査を実施した。面接はプライバシーが守られる個室で行い、面接内容は研究協力者の了承を得て録音した。

5. データの分析方法

インタビューで得られたデータは、逐語録に起こして元ラベルを生成し、質的統合法（KJ法）を用いて分析を行った。質的統合法（KJ法）は、断片情報に内在する論理と断片情報の統合により整合性のある論理構造としての全体像を発見するための手法である（山浦，2008）。そのため、地域活動に参加していない一人暮らし高齢者の語りから、死生観の構造を明らかにするには、質的統合法（KJ法）が適していると判断した。分析は以下の手順で行った。

1) 個別分析

(1) ラベルづくり

逐語録から研究協力者の語りの内容を損なわないよう要約し、元ラベルを作成した。

(2) グループ編成

作成した元ラベルを一覧できるように広げ、ラベル間の類似性に沿ってグループ化し、集まったラベルの全体感を一文で表現し表札を作成した。最終ラベルが5～6枚になるまでグループ化と表札作成を繰り返す行い、最終ラベルにシンボルマークを作成した。

(3) 見取り図の作成

最終ラベル間の相互関係を検討し、関係性に基づいて配置した。その後、関係記号と添え言葉を記入し、見取り図とした。

2) 総合分析

個別分析の具体性を残しながら、抽象度が高すぎない段階である最終ラベルの2段階前のラベルを総合分析の元ラベルとして用いた。個別分析と同様の手順で分析を行った。

6. 信頼性と妥当性の確保

分析の信頼性と妥当性を確保するため、研究者は質的統合法（KJ法）の開発者より研修指導を受けた上で本研究を実施した。また、これまでに質的統合法（KJ法）を用いた研究やその指導の経験を有する共同研究者と全分析過程においてディスカッションを重ねながら分析を進めた。

7. 倫理的配慮

本研究実施に当たり、研究協力者に文書と口頭で研究の趣旨・方法、研究への協力は自由意思であること、協力を辞退した場合にも不利益を生じないこと、個人情報保護を徹底すること等について説明し同意を得た。また、本研究は名城大学研究倫理委員会における承認を得て実施した（承認番号：2019-007-1）。

IV. 結果

1. 研究協力者の概要

A村またはB村社会福祉協議会担当者より紹介を受け、本研究への協力を同意が得られた研究協力者は8名であった。うち1名が女性で、他7名は男性であったため、性別による偏りを除外するために、男性7名を研究協力者とした。研究協力者の年齢は60歳代2名、70歳代4名、80歳代1名であり、平均年齢は73.7歳（後期高齢者は3名）であった。

一般的に65歳以上を高齢者とするが、インタビュー後に、1名は実年齢が64歳10か月であることが明らかになった。琉球大学法医学講座のまとめによると、沖縄県における2016～2018年の3年間の孤立者数で最も多いのは60代であり（梅田，2019）、孤立死のリスクが高い年代であることから、本研究の研究協力者に含めた。

研究協力者の一人暮らし期間は4～30年であり、平均期間は18.3年であった。サービスの利用状況は、1名が要介護2の認定を受け、毎日、1日3食の配食サービスのみを利用していた。1名は過去に配食サービスを利用していたが、現在は利用していなかった。他5名はサービスを利用せず一人で生活していた（表1）。

表1 研究対象者の概要

ID	年齢	性別	一人暮らしの期間(年)	インタビュー		家族以外との交流	家族との関係性	サービスの利用状況
				回数	総時間(分)			
A	80歳代	男性	20	2	100	近所に互いに野菜などをおすそ分けしあう人がいる。	2人兄弟。時々弟が訪ねてくる。	なし
B	60歳代	男性	30	1	49	友人とドライブに行く。近所の人に呼ばれたら、集まりに行く。	7人兄弟。兄が買い物をしてきてくれる。	なし
C	70歳代	男性	22	2	117	大家さんや大家さんの息子が様子を見に来る。	4人兄弟。息子たちを含めほぼ疎遠な状態。息子からの支援はほとんどない。	配食サービス要介護2
D	70歳代	男性	20	1	44	民生委員や友人と一緒に、買い物に行く。	長男家族が隣に住んでおり、食事を作って、孫が届けてくれるが、ほとんど会話はしない。	なし
E	60歳代	男性	20	2	36	友人と海に行ったり買い物に行く。	5人兄弟。ほぼ疎遠。兄との関係性は悪い。	なし
F	70歳代	男性	4	2	142	宗教関係者が訪ねてくる程度(不定期)。	妻・娘とは連絡を取り合っているが、行き来は少ない。息子たちとは、疎遠な状態。	なし
G	70歳代	男性	12	1	62	年に1回、家の近くでやる行事には参加している。散歩の時に誰かに合うと会話する。	妹家族が時々訪ねてくる。	なし

2. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観の構造

総合分析の結果、101枚の元ラベルから4段階までグループ編成し、最終的に6枚の最終ラベルとなった。本文中におけるシンボルマークは【墨付き鍵カッコ】、最終ラベルは【大カッコ】、元ラベルは【鍵カッコ】を用いて記述した。分析の結果、【回避してきた関係性：周囲へ気兼ねして自ら選んだ孤立】、【生活苦を凌ぐ拠り所：ストレスを紛らわすさやかな楽しみ】、【独りで生きる覚悟：周りに迷惑をかけずに自立して生活したい】、【厭世的な思い：身近に死を感じる体験に伴う人生への憂い】、【つなぎとめている関係：苦しい生活を支えてくれる数少ないつながり】、【最期を迎える心構え：死(死後)を語ることによる安堵】の6つのシンボルマークが抽出された。抽出されたシンボルマークをもとに作成した見取り図を図1に示す。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は、家族や地域との繋がりを縮小させる様々な背景を有していた。そのため、他者と関わることに気兼ねし、自ら【回避してきた関係性】により孤立傾向にあった。また、健康問題や経済的困難を抱えており、日頃のストレスを紛

らわすさやかな楽しみは【生活苦を凌ぐ拠り所】となっていた。これらが相まって、周りに迷惑をかけずに自立した生活を望み【独りで生きる覚悟】を内在化していた。一方で、身近に死を感じる体験に伴う人生への憂いは、早く逝きたいなどの【厭世的な思い】につながっていた。しかしながら、苦しい生活を支えてくれる数少ないつながり(友人・知人・家族)と【つなぎとめている関係】を保持し、死への不安や死後の対処を語ることで安堵し、【最期を迎える心構え】につながっていた。

表2 沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観

シンボルマーク	最終ラベル	代表的なラベル
回避してきた 関係：周囲に 気兼ねして選 択した孤立	元々、人と交わることが 苦手なうえ、移動手段も なく、思うように動かせ ない身体で集りなどに参 加すると、周りに迷惑を かけるから、親せきや近 所との関係は自分から避 けてきた	「(老人会等の) 集会は、ほとんど僕、行かない。昔、車が あった時代は行ったけど(D020)」 「地域の活動もね、これはしないといけないんだけど、無理 して倒れでもしたら、あったー(皆)の迷惑になるさーね (F026)」 「たまに口が合わん時、かみ合わん時、すぐカッとするから (皆と仕事するのが怖い)(E015)」 「僕、戦前の生まれですよ。もう最低の貧層だったから、学 校も歩け(行け)ないし、裸足で行ったんだ、中学は。だから 勉強もできないし、親と喧嘩したことあるんだもん。だから 、そういう関係で、あれ(人前が出るのが嫌になった)なん です(A050)」
生活苦を凌ぐ 拠り所：スト レスを紛らわ せるささやかな 楽しみ	不便で不自由な生活によ る鬱憤や日頃のストレス を酒やドライブで気を紛 らわせたり、ラジオやテ レビを視聴したり、誰か と話すことがささやかな 楽しみになっている	「普通の生活しとる人から考えたらね、ほんとに不便だよ。 だけど僕はずっと1人暮らしだからね、慣れてる(B014)」 「夕方、出かけることも多いよ。車持ってるからな。気を紛 らすために、北部をぐるっと回ってみたりよ(G007)」 「このラジオよ、助かった。子守唄みたいな感じでね。何か やってればもう、安心してね、演歌とか好きなもんだから、 民謡とかね(C054)」 「誰も来ないさ。だから、鬱憤が、たまるわけよ。そうなる と、すぐに(酒)飲んで(C033)」
独りで生きる 覚悟：周りに 迷惑をかけない ように自立 した生活をし たい	持病を悪化させないよう に食事に気を配ったり、 認知症の予防や運動など で健康に気をつけること で、周りに迷惑をかけない ように最期まで一人で 生きていきたい	「今はよ、隣近所にも迷惑掛けないように、静かに生きて、 健康であればいいと思う(G027)」 「(子供に)何も負担かけないように、自分としてはある程 度体に気を付けないと、子どもたちに迷惑を掛けるんじや ないかというのがうちの本心(D005)」 「塩分はいつも買うとき見るよ。脑梗塞起こして動けなく なったらまずいからさ。(G030)」
厭世的な思 い：身近に死 を感じる体験 に伴う人生へ の憂い	家で倒れたときにすぐに 助けてもらえず死を覚悟 した体験や、十分な食事 が摂れない空腹感や持病 のコントロールが難しい ことから、人生に希望が 持てず、早く逝きたいと 思う	「(今後の生活について)もう大変で死んだほうが良いなっ て思うことあるよ、何回も。食べるものが無いさ。腹が減っ てね、夜も寝れないわけよ(C057)」 「1回はね、熱射病かかったよ。『あー、お母ちゃんとか行く なー』と思ったけど、弟に起こされたよ。弟が飛び込んでき て、お茶と水買ってきて飲まされて、あれで復帰したよ。 (E011)」 「(今後の生活や最期を迎えるときのことは)もう考えん で、テレビだけ見てる。あんまり考えたら、ここが狂う。頭 が(E017)」
つながり を求めて いる関係：苦 しい生活を支 えてくれる数 少ないつなが り	身体が思うように動け ず、買い物にも困るけ ど、唯一助けてくれる友 達や知人とのつながりは 維持したいので、電話料 金は負担になるが、連絡 手段として必要だから、 電話は解約できない	「お金がないからよ。でえーじ(大変)なんだよね、これひ く(携帯電話料金の支払い)のは。固定電話も携帯もあっ て、固定電話を解約しようかなとか思ったけど、周りの人は あれ(固定電話)にかけるわけよ。庭の掃除する時にこれ (携帯電話)忘れる時もあるわけよ(A011)」 「あれ(買い物に行く際声をかけてくれる近所の人)が、気 遣って、僕のこと考えてくれる。例えば、今日、店に行くね とか、声掛けて行くから、必要な時は『行きます。お願いし ます』って、ぱっと行く。この人とは、もう長年の付き合い みたいな感じになっているわけよ。本当言えば、あの方がい なければ僕は駄目になる(D022)」

シンボルマーク	最終ラベル	代表的なラベル
<p>最期を迎える心構え：死(死後)を語ることによる安堵</p>	<p>自分のことを気にかけてくれる信頼できる友人・知人になら自分の最期についての思いを語り、伝えることで胸のつかえを無くして最期を迎えたい</p>	<p>「そこ(ベッドから2mほど離れた台所)まで行くまでに、ひっくり返ってさ、そのとき向こう(大家の)の息子が来て起こしてくれて、ちょうどよかったわけよ(C046)」</p> <p>「僕は独り者だから、(不安に思っていることは)話した方が良い。自分の兄弟より付き合いがいい、僕は信用しているから。遠くの親せきより、近くの隣の方がいいと言う話、昔の人もいうでしょ。それが一番上等だよ。隣しか見えないのに(A047)」</p> <p>「おふくろは、(親父が病院で亡くなってから)5年後に亡くなったんだけど、病院へ(お見舞いに)行って、僕は、『じゃあまたね』って帰ってきたら、(病院から)亡くなっていたとって電話があったんですよ。だから、最後の言葉は交わしていないだよ(B017)」</p> <p>「(自身の生や死について、語ったことについて)なんかスッキリしてね、安心して。つかえてたのがみんな出たような感じがしてさ、話してるだけでもね、最高にいいですよ(C060)」</p> <p>「(これまでの人生や最期の迎え方を話すことについて)これは、僕は、何の、あれ(躊躇い)もない。うちの身の上話もよう聞いてもらって、これはもう最高の気分だと思ってる(F029)」</p>

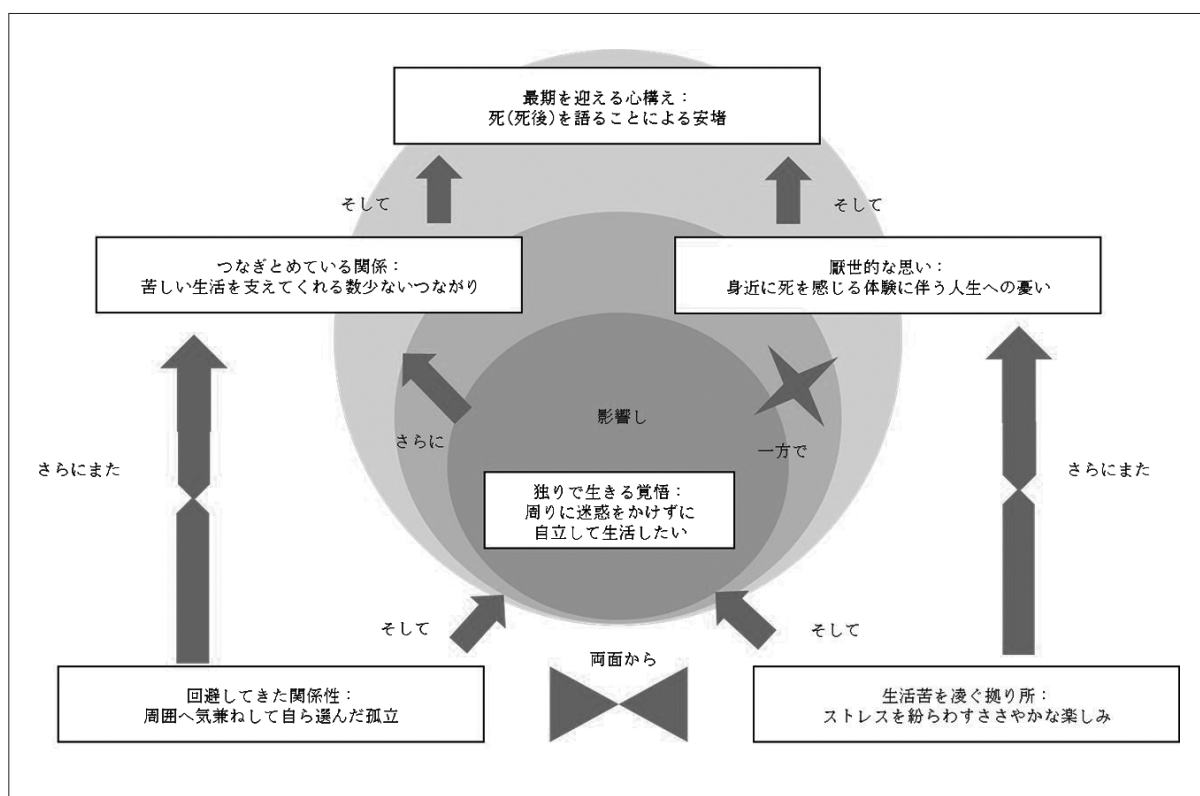


図1 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観の構造

3. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観の様相

1) 【回避してきた関係性：周囲へ気兼ねして自ら選んだ孤立】

最終ラベルは、「元々、人と交わることが苦手なうえ、移動手段もなく、思うように動かせない身体で集りなどに参加すると、周りに迷惑をかけるから、親せきや近所との関係は自分から避けてきた」とした。「たまに口が合わん時、かみ合わん時、すぐカッとするから（皆と仕事するのが怖い）(E015)」「家にいるのも嫌やったし。ちっちゃいときから逃げまわってた。だから、学校もろくに行っていないもん。小学校、幼稚園くらいから行っていない（E019）」などの語りから自身の性格からトラブルに発展しやすく、他者との関わりを避けている現状が伺えた。また、「僕、戦前の生まれですよ。もう最低の貧層だったから、学校も歩け（行け）ないし、裸足で行ったんだ、中学は。だから勉強もできないし、親と喧嘩したことあるんだもん。だから、そういう関係で、あれ（人前に出るのが嫌になった）なんです（A050)」「向こう（施設）に行けばさ、みんなに笑われてると思ってさ。寒気するわけよ。だから、行けないわけ（C044)」「大変よ、もう。病院でも、（足の痛みは）治りはしない。だから、もう地域の行事とかにも行けんなってているでしょう（A016）」などの語りから、うまくいかない対人関係や教育背景、思うように動けない自身の身体への引け目から、周りとの関わりを避けている一面も抱えていた。さらに、「僕らの年齢と言えば、普通、グランドゴルフを老人が集まってやってる。自分はやったことない。行きづらい。何ていうかな。向こうまで歩いて行くのは大変。行くよりは行かない方がいいんじゃないかなというのが、自分の本心（D012)」「地域の活動もね、これはしないといけないんだけど、無理して倒れでもしたら、あったー（皆）の迷惑になるさーね（F026)」「前は行っていたが、今は作業に行かない。会長に言ってるんだよ。足が痛くて動かすのも大変だから、座るところに座っての仕事はできないと（A029）」などの語りから、自身が地域活動へ参加することや他者と関わることで、周りに迷惑がかかってしまうと考える、地域活動への参加や周りとの関わりを避けていたことが語られた。

2) 【生活苦を凌ぐ拠り所：ストレスを紛らわすささやかな楽しみ】

最終ラベルは、「不便で不自由な生活による鬱憤や日頃のストレスを酒やドライブで気を紛らわせたり、ラジオやテレビを視聴したり、誰かと話すことがささやかな楽しみになっている」とした。「（現在の生活は）ほとんど不便だね。不便ではあるけど、しょうがないと思ってる。まず、買い物行ったりできないさ。具合悪くても

売店までは行くけど、それ以上何もできない（B012)」「普通の生活しとる人から考えたらね、ほんとに不便だよ。だけど僕はずっと1人暮らしだからね、慣れてる（B014）」との語りがあった。また、「夕方、出かけることも多いよ。車持ってるからな。気を紛らすために、北部をぐるっと回ってみたいよ（G007)」「テレビ見るほうが多いかも分からんね、ここはBS入れてるからさ。スペインとか紀行番組、ああいうのも好きだしな。映画もあるからさ。重なるときは録画しておいて、暇な時また見るわけや（G008)」「このラジオよ、助かった。子守唄みたいな感じでね。何かやってればもう、安心してね、演歌とか好きなもんだから、民謡とかね（C054)」「（新年会への参加は）楽しみだよ、ビンゴとか。ビンゴも楽しいよ。ビンゴ終わった後また、カラオケさ。好きな人は（A042)」「誰も来ないさ。だから、鬱憤がたままるわけよ。そうなるよ、すぐに（酒）飲んで（C033)」などの語りから、生活の不便さやストレスを感じながらも、テレビやラジオ、ドライブ、時折誰かと話すことなどがささやかな楽しみになっていた。

3) 【独りで生きる覚悟：周りに迷惑をかけずに自立して生活したい】

最終ラベルは、「持病を悪化させないように食事に気を配ったり、認知症の予防や運動などで健康に気をつけることで、周りに迷惑をかけないように最期まで一人で生きていきたい」とした。「（散歩は）腰痛持ちはあんまり長くは歩かないで、20分ぐらいで上等という話をいつも医師からされてる。だから、これに合わせて（やっている）（F017)」「歩けないときは、こっちでの体操がある。真っすぐ立って腰だけ60回揺らして、また真っすぐ立って、鏡見て足をこよう、こんなにして、30回して。また踵をこようして、押して、ドンドンとして、これを10回（やっている）（F018)」などの語りから、自己流の体操をしたり、散歩することで健康管理をしていた。また、「一人暮らしで転んだら大変だから、草履を履いて掃除したり、小さな野菜を作ったりしないようにしている（A030)」「今はいろんなテレビで医療関係もやってるでしょ。脳トレはこうしたほうがいいのか何とかって。これ見てるからやっぱり、ぼけねえようにしないとと思ってやってる（G015)」「鯖缶。あれ、匂い好んのだけど、おいしいとか、体に良いとテレビでいうから食べてる。病院の管理栄養士が鯖缶とポーク一切れ、蒲焼は食べて良いとってた（A002)」「塩分はいつも買うとき見るよ。脳梗塞起こして動けなくなったらまずいからさ。（G030)」などの語りがあり、一人暮らしを継続するうえで食習慣や塩分摂取、認知症予防に気を配り、無理のない範囲での運動に努めていた。さらに、「今はよ、隣近所にも迷惑掛けないように、静かに生きて、健

康であればいいと思う (G027)」「(今の生活で) 不安というのは、少しもないね。ただ人に対してなるべく迷惑を掛けたくないような心構えは、ずっとやってる。何となく、それだけは気をつけてやってる (D009)」と語っており、周りの人に迷惑をかけないように最期まで一人暮らしを継続したいという思いを語っていた。

4) 【厭世的な思い：身近に死を感じる体験に伴う人生への憂い】

最終ラベルは、[家で倒れたときにすぐに助けてもらえず死を覚悟した体験や、十分な食事が摂れない空腹感や持病のコントロールが難しいことから、人生に希望が持たず、早く逝きたいと思う]とした。「(今後の生活について) もう大変で死んだほうが良いなって思うことあるよ、何回も、食べるものが無いさ。腹が減ってね、夜も寝れないわけよ (C057)」「(配食は) 少なくとも、食べて1時間位すると腹減るわけよ (C058)」などの語りがあり、十分な食事を摂取することができない空腹感から、生活していくことへの辛さを感じていた。また、「1回はね、熱射病かかったよ。『あー、お母ちゃんどこ行くなー』と思ったけど、(たまたま訪ねてきた) 弟に起こされたよ。弟が飛び込んできて、お茶と水買ってきて飲まされて、あれで復帰したよ。(E011)」「頭打って倒れて寝てたらさ、もう動けんのよ。その(頭打つ)前にね、水道料金の領収書のこと、じゃあ11時ごろ(家に)来てくれと言ってたんですよ。それで来た人が倒れてるの見つけてくれて、携帯で救急車呼んでもらってね。えらいことだった (C049)」「(血圧が高く、医師に危険だと言われたことで) 早く逝たらなって思う。(生きるのも) 面倒くさい。惜しくもない。おっ母のところ早く逝ければなって思う (E021)」「(今後の生活や最期を迎えるときのことは) もう考えんで、テレビだけ見てる。あんまり考えたら、ここが狂う。頭が (E017)」などの語りから、一人ではどうすることもできない状況から死を意識した体験に伴う厭世的な思いを抱えていた。

5) 【つなぎとめている関係：苦しい生活を支えてくれる数少ないつながり】

最終ラベルは、[身体が思うように動けず、買い物にも困るけど、唯一助けてくれる友達や知人とのつながりは維持したいので、電話料金は負担になるが、連絡手段として必要だから、電話は解約できない]とした。「あれ(買い物に行く際声をかけてくれる近所の人)が、気遣って、僕のこと考えてくれる。例えば、今日、店に行くねとか、声掛けて行くから、必要な時は『行きます。お願いします』って、ぱっと行く。この人とは、もう長年の付き合いみたいな感じになっているわけよ。本当言えば、あの方がいなければ僕は駄目になる (D022)」「大家さんの息子さんよ、雨降るときも台風の前にも来る。

『なんでこんなするかー』って言ったら、『あんたが、ここで亡くなったら大変だよ』って。『あんたがここでそのまま、眠ってるのあぶないよ』って。来るんですよ (C052)」など、困った時に援助してもらえる人とのつながりを何とか維持したい思いが語られた。また、「そこ(ベッドから2mほど離れた台所)まで行くまでに、ひっくり返ってさ、そのとき向こう(大家の)の息子が来て起こしてくれて、ちょうどよかったわけよ (C046)」「(地域の人との交流に参加するのは) 楽しいというより、これは必要だろうと思っている。同じ部落で、つながりなければ何かあった時にお願いできないさ (B008)」などから、身体を思うように動かさず、生活を継続する上で他者による援助が必要な現状と、つながることの重要性が語られた。さらに、「お金がないからよ。でえーじ(大変)なんだよね、これひく(携帯電話料金の支払い)のは。固定電話も携帯もあって、固定電話を解約しようかなとか思ったけど、周りの人はあれ(固定電話)にかけるわけよ。庭の掃除する時にこれ(携帯電話)忘れる時もあるわけよ (A011)」などの語りがあり、お金がないから電話を解約したいけど、周りの人と連絡が取れなくなることへの不安を語っていた。

6) 【最期を迎える心構え：死(死後)を語ることによる安堵】

最終ラベルは、[自分のことを気にかけてくれる信頼できる友人・知人になら自分の最期についての思いを語り、伝えることで胸のつかえを無くして最期を迎えたい]とした。「僕がお願いしているんだよ。亡くなった時は、いったーがさんとうならんどーと(あなた達が面倒見ないといけないよーと)・・・亡くなった後のことはわからない。人間、生きてる人の考え方が信用されないといけない。亡くなってからこんなじゃなかったと言われたくもないし。しかし、嫌なことを言う人もいるけどね (A049)」「(不安に感じることは) 一人で、そのまま、逝くんじゃないかと思ってよ。何か眠ってて、そのまま逝くこともあるでしょ。(逝くって) 言ってくれればいいけど (C026)」「そのまま寝るんだったら、誰かに一言いって逝きたいね。何か言えればいいけど (C056)」などの語りから、信頼できる他者に自身の最期を託してから逝きたいという思いを抱えていた。また、「(これまでの人生や最期の迎え方を話すことについて) これは、僕は、何の、あれ(躊躇い)もない。うちの身の上話もよう聞いてもらって、これはもう最高の気分だと思ってる (F029)」「(自身の生や死について、語ったことについて) なんかもスッキリしてね、安心してる。つかえてたのがみんな出たような感じがしてさ、話してるだけでもね、最高にいいですよ (C060)」など、他者に自身の死生観を語ることは安堵感につながる事が語られた。

V. 考察

1. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観の特徴

松田、永田、新城（2019）は、最終学歴が低いほど閉じこもり予備軍の高齢者割合が高くなると報告している。研究協力者らは、教育背景への引け目や他者と交わることへの苦手意識等を抱えており、家族や地域とのつながりを縮小させ、孤立傾向となる様々な要因を有していると考えられた。研究協力者の平均年齢は74歳であり、ほとんどが1945年の沖縄戦直後のアメリカ統治時代や日本復帰などを経験していた。戦後の教育について小国（2003）は、沖縄の日本復帰運動の中で標準語教育運動が盛んに取り込まれ、方言札を原因に影日向のある児ができた、自由に話す意欲を封ずる、些細な表現まで言い争い喧嘩になったことへの反省等を報告している。研究協力者らは、このような社会背景をきっかけに、他者と関わることへの恐怖心や不信感を抱くことになり、他者との関わりを避けるようになったり、関係性を築くことへの苦手意識に影響したと考えられた。さらに、沖縄戦の前後に幼児期であった高齢者は、戦争が原因で小学校さえ通えなかった状況も容易に想像できる。人並に学校教育を受けることができなかつた子どもは、周囲の人より劣っていると感じ、自尊感情の低下や他者との関係性の構築に負の影響を与えたと推察され、研究協力者らの語る死生観にも影響したと考える。

溝口、大城（2019）による一人暮らし高齢者が抱えるエンドオブライフの思いに関する文献検討において、「経済的負担に対する不安などの問題」を抱えていたことが示されており、本研究においても同様に経済的困窮状態にあったことが語られた。経済的困窮は食生活に影響し、生活苦や空腹感から【厭世的な思い】につながっていた。先行研究においても、社会的孤立高齢者は栄養状態の悪化や脱水、るい瘦状態に陥りやすいことが示されている（小川、2013）。また、一人暮らし男性高齢者である研究協力者は慢性疾患を抱えていることも多く、身体症状があるなどの理由から周囲の気遣いを受ける体験をしていた。その際、気遣いを受けることへの感謝と同時に、相手の世話になることへの申し訳なさから、迷惑をかけたくないという思いを抱えていた。一人暮らし男性高齢者は経済的困窮から栄養状態の悪化をまねいたり、慢性疾患を抱えていても、これまで一人で生活してこれたという自信から、これからもできる限り周囲に迷惑をかけずに生活していきたいという自立した生き方へのこだわりと誇りを持っているのだと考えられた。

Lloyd-Williams et al.(2007) は、高齢者にとって良い死とは、最小限の身体的・精神的障害、他者への最小

限の負担などを満たすものと述べている。つまり、一人暮らし男性高齢者自身にとっても、周囲の人にとっても負担が少ない、良い死を迎えるためには、生活を阻害しないレベルの身体的・精神的な健康状態を維持していくことが重要である。本研究の対象者である地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者も、周りに迷惑をかけないように自立した生活を送る覚悟を持って食事や運動など、健康状態の維持に努めていたと考える。

Arslantaş et al.(2015) は、慢性疾患を抱えていることは、不十分なセルフケアや疼痛、社会生活の制限などの問題をもたらすと述べている。さらに高齢者の場合は、身体的または社会的な制限によって、これらの状況に対処することが困難となり孤独を感じる可能性を指摘しており、死への不安に影響を与えたと考えられた。また、これまでに家で転倒して動けなくなったり、重大事故などの体験や、生活に影響する身体症状、慢性疾患を抱えていることが、現在の生活の中で死への不安を感じさせる要因となっていると考えられた。福島（2013）は孤独死の不安を抱える一人暮らし高齢者を対象とした研究において、「何かあったときに相談できる人が身近な距離にいるということが生活するうえでの安心感をもたらし、孤独死の不安を軽減させている」と述べている。本研究でも同様に、数少ない信頼できる友人・知人との繋がりを有することや、日常の中で酒やドライブなどで気を紛らわせたり、ラジオやテレビを楽しむことが、死への不安の軽減に影響していたと考えられる。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観の特徴として、様々な生活背景を抱えていても、これまで一人で生活してこれたという自信から、これからもできる限り周囲に迷惑をかけずに生活していきたいという自立した生き方へのこだわりと誇りを持っている。また、現在の生活の中で死への不安を感じさせる要因が多い一方で、数少ない信頼できる友人・知人との繋がりを有することや、自分なりに生活を楽しむことが、孤立死への不安の軽減に影響していたことが示された。一般的に孤立死は予防すべき死であると考えられている（大曾根、2016；田中、森實、2016；川口、高尾、2013）。しかし、本研究の結果から、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は、孤立死のような死を迎える可能性についても納得し、そのうえで自然な死を望んでおり、肯定的な印象の死生観を抱えていることが示された。

2. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が死生観を語る意義

「語り」とは、自己を表出させる行為であり、語りを通してこれまでの自己の経験の振り返りが促される（阪

本, 2005). また, 中村, 森川 (2014) によると, 女性要支援高齢者は「老いや障害によって変化せざるを得ない交流の形から, 残された人生を考えると, 自己の統合の過程すなわちアイデンティティの統合を体験していた」と報告している. 高齢者は「人生の終わりを意識したとき、『これだけは残したい』『何かを伝えたい』『自分の人生の意味を見つけない』という気持ちが高められる」ことが明らかになっている (やまだ, 2008). さらに, 語りを通して「人生を物語として編むことによって, 経験が意味づけられ, 世界の多様な見方が可能になる」とも述べていることから, 高齢者がエンドオブライフを意識してこれまでの人生における経験を語ることは, 自身の人生を意味づける手段であると考えられる. 研究協力者は, 誰かに自身の死生観を語ることを通して安堵感を得ていた. しかし, 誰にでも死生観を語るができる他者が存在するわけではなく, 無縁状態にある人にとっては困難であるといえる. 本研究における地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は, 無縁状態ではなく, 信頼できる友人・知人との限定的なつながりが維持されていた. 本研究の対象地域は, 県内でも地域・血縁の紐帯が強く (琉球新報, 2016), 研究協力者が地域活動に参加しなくてもコミュニティの一員として気遣われていた. このような地域とのつながりの中で誰かとつながり, これまでの人生やこれからの生き方, 最期の迎え方について語ることが, 死生観の構築につながると考える.

森 (2014) は, 「孤独は, 死とは無関係である. その亡くなった人は, 死ぬ間際まで自分の好きなことをしていたかもしれない. それを、『孤独だったのね』と勝手に決めつけるのは余計なお世話というものだ」と述べている. 五木 (2017) によると, 本を読むことや回想することで, 脳内に世界が広がり, 孤独であればあるほど豊かで自由な風景を見せることから, 「人間は孤独だからこそ豊かに生きられる」「孤立を恐れず, 孤独を楽しむのは人生後半期のすごく充実した生き方のひとつ」であると指摘している. つまり, 孤独を楽しんで亡くなったにもかかわらず, ネガティブな意味での孤独であったと決め付けられる可能性がある. 一方で, 孤独であるからといって不利益ばかりがあるのではなく, 個性を育む機会となることや, 人生を自由かつ充実したものにすることができることがわかる. このように, 孤独つまりひとりであることは肯定的な意味をも含んでおり, ひとりであること=悲しいことではないと考える.

鎌田 (2015) は, 必ず訪れる死と徹底的に闘うだけでなく, 死を手なずけて傍らに置き, 最期まで自分らしく生きるという方法もあると述べている. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は, 孤立死を含め, いつかは訪れる自身の死という現実とともに自分らしく

最期まで生きようとしているのだと考えられた. 野尻 (2015) は, 人生を「元気に」「いきいきと」「楽しく」生活することでQOL (quality of life: 人生の質) が高められ, 高いQODにつながると指摘している. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は, 孤立死を含め, いつかは訪れる自身の死という現実に対して自分なりに納得し, 自分らしく最期まで生きた後の死は, QODの高い死となると考えられる.

3. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の, その人らしさを大切にしたいエンドオブライフケアへの示唆

伊東 (2016) は, 「その人らしい死」の概念を「患者や家族の意思・価値観が尊重され, 今までの生活が大切にされたその人にとって自然な状態であり, 内面的充実を感じている状態での死」と定義している. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が, 自身のこれまでの人生で, ひとりで死ぬことを含めて孤独に生きる選択が尊重され, 精神的に充足された状態で最期を迎えることは, 「その人らしい死」であると考えられる. このような死を迎えるためには, 周囲の人の理解と支えが必要である.

内閣府 (2010) によると, 孤立死の問題点として, 人間の尊厳を損なうものであること, 死者の親族や近隣住人, 家主などの周囲の人が受ける心理的な衝撃や経済的な負担が指摘されている. また, 厚生労働省 (2008b) によると, 孤立死は死後の後始末における行政の手続きや遺体の処理等への経済的・人的負担, 行政への不信任や隣近所の人への非難, 住宅の資産価値への影響があることを指摘している. つまり, 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が, 孤立死だとしても誰にも迷惑をかけずに自宅でピンピンコロリのような自然な死であったとしても, 地域や周りへ影響を与えることは必然である. 一般的に孤立死は, 社会福祉協議会や地域包括支援センターの職員などの関連職種と周囲の人により死後の後始末が行われる. 以前の葬儀は遺族・親族のみならず地域共同体, 職場共同体によって行われる葬送儀礼であったが, 現在では家族や親族, 地域とのつながりが薄れ, 誰からも看取られない孤独な葬儀も生じている (嶋根, 玉川, 2011). このような社会の中で, 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が望む孤立死だとしても, 自然な死を迎えるには, つながりを維持できている人や近隣住人が死後の後始末などを地域での支え合いとして捉え, 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者のその人らしい死として受容できることが重要であると考えられる.

孤立死の要因である社会的孤立は, ソーシャル・サポー

トの乏しさや低所得・住環境の劣悪さ、生活満足度の低さ・孤独感・抑うつ傾向・自殺・健康寿命の喪失、犯罪との関連が明らかになっている（斎藤，2018）。また、石田（2011）は、社会において多くの人は、家族を重要なサポート源としているが、今後、家族的連帯が一層の危機にさらされることから、社会保障システムの整備が急務であると指摘している。内閣府（2013）は「気づき、傾聴、つなぎ、見守り」を役割とするゲートキーパーを養成し、自殺対策に取り組んでいる。孤立・孤立死対策においても同様に、地域において孤立リスクがある高齢者の存在に気づき、見守り、必要時に専門職等につなぐことが重要である。さらに石田（2018）は、「孤立者に必要なのは、まず、高いサポート力を持つ『強い紐帯』であると述べている。頻繁に会わず親しい訳では無い関係である「弱い紐帯」に対し、「強い紐帯」とは親密で頻繁に会う関係を指している。地域において地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者を支援するには、「強い紐帯」を誰とどのように築くのが課題と言える。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は、想定外の死を迎える可能性もあることから、現在つながっている人との関係性や、社会福祉協議会等の公的機関や地域の医療専門職とのつながりを維持し、本人の思いを語ってもらうことで、その人らしい死の支援につながると考える。そして、公的機関や医療専門職、地域による見守りや、語りの場を利用して地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が具体的にどのような死を迎えたいと考えているのか、死後の対処は誰が何を担うのかなどについて確認しておく必要があると考える。

五木寛之氏は対談の中で、「ひとりで生きて、ひとりで死ぬシステム、いうなれば『孤独死の文化』がまだできていない。そういう常識やカルチャーができれば、周りも穏やかに（孤独死を）認めてくれる流れになる」と述べている（吉川，2018）。このようなひとりで死ぬ文化を形成していくことが、求められている。五木氏のいう孤独の文化とは、ひとりで生き、ひとりで死んでも受け入れてくれる地域の文化を意味すると考える。つまり、ひとりで死ぬことも死の有り様として、選択肢の一つであるということとを共有し、孤立死であっても死後の後始末をしてくれるつながりを保つことと、その人らしい死を受容できる文化を醸成していくことが求められていると考える。

VI. 結論

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者は、死を想像させる体験による【厭世的な思い】を抱えながら、【独りで生きる覚悟】を持って生活していた。その

一方で、【つなぎとめている関係】である信頼できる友人・知人に一人で暮らし続けることへの不安や今後の人生について語ることで、【最期を迎える心構え】をしたいという死生観を抱いていた。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者がその人らしい死を迎えるためには、独りで死ぬことも含めて、孤独に生きる選択が尊重され、精神的に充足された状態で最期の時を迎えられるように、周囲の人の理解と支えが必要である。また、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が具体的にどのような最期を迎えたいと考えているのか、死後の対処としては誰が何を担うのかなどについて、公的機関や医療専門職を中心とした地域での見守りや、語りの場を利用して確認しておく必要がある。そして、ひとりで死んでいくことも死の有り様の選択肢の一つであるということとを共有し、死後の後始末をしてくれるつながりを保つことと、その人らしい死を受容できる看取りの文化を醸成していく重要性が示唆された。

VII. 研究の限界と課題

本研究では、地域活動に参加していない一人暮らし高齢者の男性のみを対象としているため、地域活動に参加していない一人暮らし高齢者の死生観において、性別により違いがみられるのかという視点では分析ができなかった点は、今後の課題となった。また、調査を行う中で見えてきたこととして、本研究の研究協力者は、どこかで家族や公的機関以外にも誰かとの限定的なつながりが維持されていた。つまり、まったくの無縁の中で孤立している状況ではなかった。今後、無縁社会における看取りのあり様が危惧されており、他者とのつながりを持たない一人暮らし高齢者の死生観を明らかにするための調査・研究は、継続すべき課題になるといえる。

謝辞

本研究にご協力いただいた対象者の皆様および、沖縄県北部地域の社会福祉協議会担当者に心より感謝する。

なお、本研究は平成31年度名城大学環太平洋地域文化研究所新規採用者助成を受けて実施した。

引用文献

Arslantaş, H., Adana, F., Ergin, F. A., Kayar, D., & Gülçin, A. C. A. R. (2015): Loneliness in elderly people, associated factors and its correlation with quality of life: A field study from Western Turkey.

- Iranian journal of public health, 44(1), 43-50
- 福島忍 (2013): 都営住宅における孤独死の不安を抱える一人暮らし高齢者の特性, 日本の地域福祉, 26, 1-9
- 平井寛, 近藤克則, 市田行信, 末盛慶 (2005): 高齢者の「閉じこもり」, 日本の高齢者一介護予防に向けた社会疫学的大規模調査, 公衆衛生, 69(6), 485-489
- 石田光規 (2011): 孤立の社会学 無縁社会の処方箋, 176-177, 勁草書房
- 石田光規 (2018): 孤立社会不安 つながりの格差, 承認の追求, ぼっちの恐怖, 211-212, 勁草書房
- 五木寛之 (2017): 孤独のすすめ, 6-7, 中央公論新社
- 伊東美佳 (2016): わが国における「その人らしい死」に関する概念分析. キャリアと人生, 9(1), 13-18
- 川口一美, 高尾公矢 (2013): 団地における孤独死の発生と防止対策に関する考察, 聖徳大学研究紀要, (24), 17-24
- 河村諒, 中里和弘 (2016): 近親者と死別した高齢者の悲嘆に関連する死生観についての検討, ホスピスと在宅ケア, 24(1), 24-37
- 小国喜弘 (2003): 戦後沖縄と国民教育—反復される記憶—. アジア遊学, (53), 14-24
- 鎌田實 (2015): 死を受けとめる練習, 214-218, 株式会社小学館.
- 厚生労働省 (2002): 孤立死の防止対策について都道府県などに通知, <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200002aauc-att/2r985200002aavt.pdf> (2018年10月22日閲覧)
- 厚生労働省 (2008a): 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(「孤立死ゼロ」を目指して) —報告書—, <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h0328-8a.pdf> (2019年1月17日閲覧)
- 厚生労働省 (2008b): 地域における「新たな支え合い」を求めて—住民と行政の協働による新しい福祉—. これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書, <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html> (2019年2月17日閲覧)
- Lloyd-Williams, M., Kennedy, V., Sixsmith, A., & Sixsmith, J. (2007): The end of life: a qualitative study of the perceptions of people over the age of 80 on issues surrounding death and dying. Journal of pain and symptom management, 34(1), 60-66
- 松田めぐみ, 永田美和子, 新城慈 (2019): 沖縄県過疎地域に暮らす高齢者の「閉じこもり予備軍」の状況とその関連する要因, 名桜大学紀要, (24), 13-21
- 溝口広紀, 大城凌子 (2019): 一人暮らし高齢者が抱くエンドオブライフの思いに関する文献検討. 名桜大学紀要, (24), 93-103
- 森博嗣 (2014): 孤独の価値, 162-164, 幻冬舎
- 内閣府 (2010): 3 家族と世帯, 第1章 高齢化の状況, 平成22年版高齢社会白書, 2023年1月3日入手, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/pdf/1s3s_3.pdf
- 内閣府 (2013): 2 ゲートキーパーとは, ゲートキーパー養成研修用テキスト, 6, 内閣府自殺対策推進室, 2023年3月30日入手, https://www.mhlw.go.jp/content/text3_02_6.pdf
- 内閣府 (2019): 3 高齢者の社会的孤立が生み出す問題, 第1章 高齢化の状況, 平成31年版高齢社会白書, 2023年1月3日入手, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf
- 内閣府 (2022a): 3 家族と世帯, 第1節 高齢化の状況, 第1章 高齢化の状況, 令和元年版高齢社会白書, 2023年1月3日入手, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf
- 内閣府 (2022b): 3 生活環境, 第2節 高齢期の暮らしの動向, 第1章 高齢化の状況, 令和元年版高齢社会白書, 2023年1月3日入手, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s2s_03.pdf
- 中村もとゑ, 森川千鶴子 (2014): ひとり暮らしの女性要支援高齢者が他者と交流することの意味, 老年看護学, 18(2), 76-84
- 野尻雅美 (2015): 高齢者の孤独死と満足死, 「一人」と「ひとり」からの考察. 日本健康医療学会雑誌, 24(2), 99-102
- 小川栄二 (2013): 社会的孤立と行政, 河合克義・菅野道生・板倉香子 (編), 社会的孤立問題への挑戦 分析の視座と福祉実践, 72-79, 法律文化社
- 越智裕子 (2015): 高齢者の死生観に関する研究: 「死生観」と「スピリチュアリティ」と「幸福な老い」との関連を中心に, 聖学院大学総合研究所Newsletter, 24(3), 22-27
- 大曾根卓 (2016): 検死からみた孤独死の現状 (特に農村型孤独死について), 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 39(4), 205-208
- 琉球新報社 (2016): 沖縄県民意識調査報告書.
- 斎藤雅茂 (2018): 高齢者の社会的孤立と地域福祉 計量的アプローチによる測定・評価・予防策, 28-46
- 阪本陽子 (2005): 高齢期の社会化における「語り」の意義, 教育研究所紀要, (14), 73-78
- 嶋根克己, 玉川貴子 (2011): 戦後日本における葬儀と

- 葬祭業の展開. 専修人間科学論集, 1(2), 93-105
- 菅原普 (2018): 孤独死, 推計2.7万人つかめぬ実態「国に定義なく」, 2019年1月21日入手, <https://www.asahi.com/articles/ASL5X55P8L5XTIPE026.html>
- 高岡哲子, 紺谷英司, 深澤圭子 (2009): 高齢者の死生観に関する過去10年間の文献検討—死の準備教育確立に向けての試み—, 名寄市立大学紀要, 3, 49-58
- 田中博子, 森實詩乃 (2016): 団地自治会による高齢者の孤独死予防の取り組みに関する一考察. 日本地域看護学会誌, 19(1), 48-54
- 上田智子, 上原英正, 加藤佳子, ほか (2010): 孤独死(孤立死)の定義と関連する要因の検及び思想的考究と今後の課題, 名古屋経営短期大学紀要, (51), 109-131
- 梅田正覚 (2019): 沖縄の孤独死の実態3年で431人, 平均59歳, 8割男性飲酒が原因多く, 2019年7月9日入手, <https://ryukyushimpo.jp/news/entry-881275.html>
- 山田護 (2019): 高齢化・過疎地域における地域医療. 九州ブロック地域医療交流会in熊本, 沖縄保険医新聞, 4
- やまだようこ (2008): 老年期にライフストーリーを語る意味, 老年看護学, 12(2), 10-15
- 山浦晴夫 (2008): 科学的な質的研究のための質的統合法(KJ法)と考察法(I), 看護研究, 41(1), 11-32
- 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, ほか (2008): 高齢男性の社会参加要因, 川崎医療福祉学会誌, 17(2), 437-443
- 吉川慧 (2018): 「孤独死は恥ずかしくない」作家・五木寛之が日本人に問う, 21世紀の生き方「和して同ぜず」と「楳円の思想」がヒントになる, HUFFPOST, https://www.huffingtonpost.jp/entry/hiroyuki-itsuki_jp_5c596902e4b09bd6f91e181d (最終閲覧日: 2023年3月30日)
- 吉田千鶴子, 木内千晶 (2004): M市老人クラブ員のEND OF LIFEに関する意識調査, 岩手県立看護学部紀要, 6, 67-76
- 吉田千鶴子 (2010): 高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方—エンドオブライフ期への支援システム構築をめざして—, 豊橋創造大学紀要, (14), 96-110

A study of view of death by aged men living alone who doing not participate in community activities in the northern part of Okinawa

MIZOGUCHI Hiroki, OSHIRO Ryoko

Abstract

Purpose: This study examines the views of life and death of elderly men who had been living alone without participating in community activities, and explores possible end-of-life care options that value their human personality.

Methods: Semi-structured interviews were held with aged men who live alone and do not participate in community activities in northern part of Okinawa. They were asked about their views on deaths and results were analyzed using the qualitative unification methods (KJ).

Results and Considerations: They had【Prepared to live alone】. However, he harbored 【Pessimism】 due to near-death experience. On the other hand, they had a view of life and death in which they wanted to 【Preparations for the final days】 by talking about their anxieties and life to their 【Relationships that hold you together】, such as trusted friends and acquaintances. It is important to maintain a relationship with the person who will take care of the aftermath of death. And, creating a culture of end-of-life care that allows people to solitary death in their own way, including the possibility of dying alone, will lead to end-of-life care that values the individual's personality.

Keywords: living alone, elderly men, view of life and death, solitary death